

ハードボ

イルドな夜

真山慎吾

Photography by shingo-mayama



春の雨

雨。夕刻から振り出した雨は雨足を強めながら次第に激しさを増していた。男はカウンター越しに開け放たれた引き戸の向こう側の路面を叩く雨を静かに眺めていた。時折、夜風に小さくたなびく暖簾。それを潜り抜けて店を訪れる客はまだいない。駅前から細い路地を入った奥まった一角にある小さな料理屋。路地を行き交う人影もまばらな帯には、こじんまりとした酒場が寄り添うように軒を並べる。酔い客の交わす賑やかな会話が時折店の前を通り過ぎて行くと、静けさの向こうから雨音が小さく響いた。

この店を開けて二年。弟分がどこかの伝手で用意した古びた小料理屋。商売を始めるつもりもなく、引き戸を開けて板場の中で男はただ待っていた。そして二年。待ち続ける間に馴染みの客が訪れる様になり、男は無口にそれを迎えていた。男は作務衣の襟元を直すと雪駄履きの足を引きずり板場の端の一升瓶を取り出してコップに注いだ。鍋の中から付き出しの煮物を小鉢に移し、摘んで口に運ぶ。料理人の経験などない。気の向くままに作る素朴な酒の肴はいつの間にか好評だった。コップ酒を片手に通りに眼を向ける。暖簾の向こうに雨に抱かれる紺のスーツ姿があった。

「いらっしゃい」

男の声に表情はない。気が付くといつの間にかこうなっていた。抑制の効いた静かな声。暖簾に隠され、路上に立つ男の顔は見取れないが男にはその顔が分かっていた。

「待ってたぜ」

スーツ姿の男の靴元が戸惑うように小さく動いた。暖簾の隙間に差し込まれた日に焼けた手でゆっくりと暖簾を持ち上げると、色黒の大柄な男がゆっくりと店の敷居を跨いだ。歳格好は三十半ば。日に焼けた顔に曇った眼が静かに男を見つめていた。雨に濡れたスーツの肩を軽く手ではたく。ビニール傘を入口に無造作に立てかけると小さな椅子を引いて黙って腰掛けた。男は自分と同じように一升瓶からコップに冷酒を注ぐと黙ってスーツの男の前に差し出した。沈黙。静かな時間の向こう側に雨音だけが響く。スーツ姿の男はおもむろにコップ酒に手を伸ばすと、口に含むようにして酒を呑んだ。

「何で逃げなかったんですか。北へ逃げれば迎える舎弟はいくらでもいる」

見上げる視線。相変わらず曇った視線で男を見つめて言った。一端の筋者になった。切れ味の鋭い刃物がしっかりと鞘に収まる。そんな身のこなしがすっかり堂に入っている。臭いを消し、いつでもまたそれを漂わせる事ができる器量をいつの間にか身に着けていた。ガラガラとした時期を連れ歩き、面倒を見たのは男だった。

「待っていたからな。お前が遅すぎた」

「理由を知りやしません。叔父貴の事だ。訳はある。ただ親父を殺っちまう事はなかったんだ」
スーツ姿の男はカウンターに眼を落としながら噛み締めるように静かに言った。

「殺っちまったのさ。昔話をしても仕方ねえ」

男は手元のコップ酒をぐびりと飲み干した。首元の手拭を外すと、まな板の上から刺身包丁を取り上げてその柄にしっかりと巻きつける。カウンター越しに身を乗り出すとスーツ姿の男の前に置いた。組を継いだのはスーツ姿のこの男だった。男がここに居る事を知らなかったはずはない

。知らない振りをしていた。それだけの事だ。

「ここで事になりや迷惑になる奴がいる。そいつを呑んだら表に出ろよ」
コップ酒に視線を向けるスーツ姿の男の肩が小さく揺れた。男はカウンターの跳ね上げ板を持ち上げると雪駄を引き摺りながら暖簾を潜った。春の雨が男を濡らした。

彼女のナイフ

「待ちなさいよ」

凜とした声。落ち着き払ったその声の中にある背中を突き刺す棘に男は思わず立ち止まった。

「あんたね」

見慣れない女。空きスペースが目立つ地下駐車場の壁に響く声は、明らかに男に向けられていた。

「誰だい」

女はヒールの音は響かせながら二、三步、男に近寄った。黒いカットソーに濃紺のジーンズ。ラフな格好の長身の女。栗毛色のストレートの髪を長く靡かせ、化粧気のない顔に爛々と輝く鋭い視線が男に向けられていた。スタイルの良い女。化粧をすれば振り返らない男はいないだろう。ただ、その鋭い眼光が全てを台無しにしていた。

「あんたが殺したのね」

問い詰めるような棘のある口調。女は硬い表情をしたまま男を見つめて言った。背後に回していた女の右手が意思を持って腰に当てられている。ナイフ。薄暗い駐車場の照明に鈍く光る刃先が上向きに男の胸元を目指していた。

「似合わないぜ」

男はシャツの胸のポケットから取り出した煙草を口に啣えると、取り出したオイルライターを両手で包み込むようにして火を点けた。薄明かりの中に浮かぶ男の悲しげな眼が女を見つめていた。眉間に刻まれた深い皺。口元にある横に引かれた古い傷跡が男の印象を暗く重いものにしていく。女は身動きせず男を見つめていた。女の言葉で男は女が誰なのか既に理解していた。一月程前に一人で組事務所に殴りこんだ男の婚約者。殴りこんだ男はその半年前に小指一本と札束一つを差出し、それと引換えに筋者から足を洗っていた。この女の説得と新しい生活への希望。それが目の前にあったのに男は二度と訪れる必要の無いはずの事務所に単身で乗り込み、二人の組員を刺し殺して自らも命を落とした。筋を通す男気のある男。ヤクザと言うより筋者。刑事として男に接しながら何処か認める自分がいたのは事実だ。事件の知らせを聞いて動揺を抑えきれない自分に驚き、それに慌てた。

「綺麗なあんたに刃物は似合わねえ」

「あんたが殺したのね」

「そうかもな」

沈黙。男は煙草の煙をゆっくり吐き出した。薄紫の煙が薄明かりのなかを漂い、消えて行った。足を洗ってはいたが裏社会に精通する有力な情報源として付き合いは続いていた。男と男の付き合い。仕事上の付き合いのつもりでは無かったが男は自分に協力的だった。裏社会から完全に足を洗わせず、片足を残させたのは自分だったかも知れない。そして男が動くきっかけを掴ませたのも結果的には自分だ。

「何で止めてくれなかったのよ」

「俺にはその資格は無いのさ」

「デカの癖に」

「そうだな。だがな、その前に男なのさ」

男に止められた訳はない。知らないうちの出来事だった。あの男が決めた事。訳はそれ相応だったはずだ。知ったところで筋物の血がまだ生きていた男を止められた自信は男には無かった。女は腰にナイフを抱いたまま男へ向かって走り寄った。男は身動きせずに女のナイフを素手で握った。女がためらいを感じながら力なく突き出したナイフは男の手の中にあった。駐車場の床にゆっくりと落ちる血の滴に構う事なく男はナイフを折り畳み、女に差し出した。

「良い女には似合わない。あいつにお似合いの良い女だぜ」

「あの人を返してよ」

女の声から消えた棘。先ほどまで射す様だった瞳から大粒の涙が転げ落ちた。

「帰れよ。家へ帰るんだ。奴があんたを待ってるぜ」

女の手から落ちたナイフがコンクリートの上を跳ねた。

「奴はそこであんと平凡に暮らしたがってた。本気だったぜ。血が許さなかったけどな」
男は静かにそう呟くと何事も無かったように夜の闇へと歩き出した。

洒落た真似

昼下がり。容赦なく降り注ぐ真夏の陽射しが車のボンネットを跳ねる。男は窓を開け放った型落ちのセダンの中から、ステアリング越しにフロントガラスの向こうの眩しい風景に眼をやっていた。道路沿いにある廃屋。土のままの駐車スペースに車を停めて既に小一時間が過ぎていた。フロントガラスの向こうには陽炎の中に伸びるアスファルト道路。走りすぎる車も無くただ静かな時間が男の周りを流れていた。

「エアコンを入れろよ。ゆだちまうじゃねえか」

男の横で助手席のシートを倒して寝転ぶもう一人の男が襟元のネクタイを乱暴に緩めながら言った。シャツの胸元を大きく開け、だらしなくぶら下げたネクタイを片手で弄びながら天井に眼をやっている。開け放った窓から両足を突き出して足を組む様はとて刑事とは思えない乱暴な振る舞いだった。

「俺は嫌いでね。暑いも寒いもそのままが好きなのさ」

首筋に流れる汗に構いもせずに男はシートに身を沈めていた。

「変わった奴だ。昔からな」

助手席の男は投げやりな口調で言うとスボンのポケットから潰れた煙草のパッケージを取り出した。皺だらけの煙草に火を着けてパッケージを男に放る。

「煙草は胸のポケットに入れとくもんだぜ。折れちまってる」

男はパッケージから取り出した折れた煙草をダッシュボードに放ると皺だらけの煙草を手で伸ばして火を着けた。

山間の小さな田舎街。炭鉱が閉鎖されてから寂れた温泉街だけが残ったこの街に流れ着いた男は、組員2人だけの小さな組に拾われて一年前までこの街で過ごしていた。助手席の刑事とはその頃からの馴染みだった。シノギもろくに無い寂れた温泉街。男は組から任された飲み屋で真っ当に商売をし、時折訪れては嫌味を肴に酒を呑む刑事の相手をした。

「来やしないぜ」

助手席の男は煙草の煙を吐き出しながら言った。

「来るさ。約束は守る奴だ」

温泉街が賑やかになったのは二年近く前の事だった。炭鉱跡地の産業廃棄物処分場に広域組織の舎弟が運送業者として現れた。小競り合いが一年近く続き、男の組は組長の命を取られた。

「忘れやしねえってか」

「命日だからな」

「まったく似合わねえ。青臭い真似しやがって。命日に再会って柄か」

助手席の男は両手を頭の後ろで組んで横目に男を見ると天井へ煙草の煙を噴き上げた。乱暴な物言いが嫌いではない。何処か崩れた刑事。不思議な男だった。

「覚えておけよ。奴は関係ない。済んだら俺にワッパ掛けるよ」

「そうかい」

投げやりな口調。興味のなさそうな返事を返すだけの刑事に男はいささか不満だった。命日。組長が射殺されたのは一年前の今日だった。男はその日のうちに独り報復に向った。抗争相手の男

を一人撃ち殺して、組の看板を持って来させた兄弟分と落ち合ったのがこの場所だった。組長と若衆二人の小さな組。一度逃げて遠縁の組を頼るしかなかった。兄弟分は男が報復に使った拳銃を預ると男の顔に拳を叩き込み、自分抜きの報復をひとしきりなじって北へ逃げろと言った。親戚付き合いのある懇意の組と話をつける。シマは必ず守る。そう言う兄弟分と一年後の再会を約束した。炭鉱の愚連隊が看板を掲げた小さな組だったが老舗の組織として知られていた。男は幾つかの組に客人として迎えられながら一年を過ごし、無事にこの街へ戻って来ていた。

「自首しますって奴ほど信用ならねえ」

「庇ってる訳じゃねえ。俺がやったんだ」

「逃げやがった癖に。いまさら自首とは笑わせる」

「けじめだからな」

男の視線の先にある道路に黒い四輪駆動車が現れた。男は腕時計に目を落す。

「来たぜ。時間通りだ」

「来やしねえよ」

男の車に寄り添う様に路肩へ停まった四輪駆動車。運転席には長髪の若い女が乗っていた。男の車に目をやり、助手席の男に気付くと戸惑った表情を浮かべながら路上に降りた。路上の女へと近寄った男に、女は黙って胸に抱いた大きな風呂敷を差し出した。組の看板。

「あんたに任すって」

「自分で来ないでお前を寄越したのか」

女は男の顔をしばらく眺めた。瞳の大きな愛嬌のある顔に意外そうな表情が浮かんでいた。

「一年前に死んだわ。あんたにこれを渡す様に言われた。任すって言えって。これであの人とはさよならね」

温泉街のスナックで見かけた女。兄弟分の女とは知らなかった。女は風呂敷の看板に軽く手を掛けてから男に背を向け、四輪駆動車で走り去って行った。

「来ねえって言っただろ」

女には目もくれなかった男が助手席の窓越しに言った。

「知ってやがったな」

「あの晩に二人殺ったのさ。ハジキが同じだったんで三人殺し、被疑者死亡で終わってる。あいつが全部背負って消えちゃったな」

容赦なく照りつける陽射しの中で男は言葉なく遠くを見ていた。首筋から流れ落ちる汗。乾いたアスファルトの上で消えて行った。

「野良犬が洒落た真似しやがる」

助手席の男の口調に先ほどまでの投げやりさは無かった。

「自首はいらねえって訳か」

「おまえもあいつを背負って行け。話は聞かなかった事にするぜ」

「あんたも洒落た真似するじゃねえか」

「俺も野良犬だからな」

助手席のシートに寝転んだまま男が初めて口元で笑った。

バラード

カウンターにダウンライトの淡い光が揺れる。壁一面に据え付けられた大きな窓の向こう側には、漆黒の海が広がっていた。男は午前零時を過ぎた海辺のバーで、ただ過ぎてゆく時の流れに身を任せていた。カウンターの向こう側でバーテンダーが磨くグラスがダウンライトに輝く。その輝きが今の男には眩しかった。

男のほかに客のいない店内。静かに流れるバラードが、ロックグラスを口に運ぶ男の背中に静かにささやきかける。彼女は来ない。男には最初から分かっている事だった。彼女が姿を消して半年。探す事もせずに過ごして来たのは自分だ。好き勝手に暮らして来た。彼女の不満は聞き流してあしらった。彼女が姿を消すのは当然だった。誕生日ならこの店に来る。そう思ってこの海辺のバーへ来た訳でもない。ただ、この店で過ごしたかった。彼女の誕生日には必ず来たこの店で酒を飲み、バラードに身を委ねて過ごす。そう決めた時の自分を、別の自分が笑っていた。現れるはずのない彼女。待っているつもりはなかったが、席を立てない自分がいた。店を去ればそれで全てが終る。もう終わっているに違いないが、それを認めない自分が腹立たしかった。

「お約束ですか」

無口なバーテンダーが口を開く。

「違うんだ。もう帰るよ」

客のいない店内を見渡ししながら言う男に、バーテンダーは黙って氷の入った新しいグラスを差し出した。取り出したボトルの酒をロックグラスに注ぐ。ケンタッキーヴィンテージ。ケンタッキーの小さな蒸留所の造るスモールバッチバーボン。特別な時に飲みたいバーボン。そんな話を彼女としたのは遠い昔の事だ。

「好きなだけ飲ませてやってくれと頼まれました」

静かな口調でそう言ったバーテンダーの顔には、どこか意味深な表情が浮かんでいた。

「いい酒ですよ」

バーテンダーはカウンターの向こう側で、ダウンライトに照らされるケンタッキーヴィンテージのボトルに目を向けていた。

「ジャックダニエルをカウンターで飲んでる客が最後まで店にいたら、この酒を好きなだけ飲ませてやってくれ。そう言って預けて行きました」

初老のバーテンダーは目元を緩ませていた。

「いい女ですね」

「そうなんだ。ようやく気が付いたのさ」

バーテンダーがカウンター越しに差し出した紙には、見覚えのある文字が浮かんでいた。彼女の新しい電話番号だった。許してあげる。電話番号の下には一言だけそう書かれていた。

「あんたはここで最後まで彼女を待っていた。この酒を飲む資格はありますよ」

奥から取り出した電話を男の前に置いたバーテンダーは、カウンターの隅で再びグラスを磨きを始めた。

…少し酔ってからにしよう。酒が沁みた方が上手く伝えられるかもしれない…

ロックグラスに手を伸ばした男の背中をバラードが優しく包み込んだ。

